魔理沙の青春相談

澄田 康美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔理沙の青春相談

【Nコード】

N01480

【作者名】

澄田 康美

【あらすじ】

あらすじ

暇を持て余した魔理沙。誤って箒ごと木に刺さっていると、そこにある子供が通りかかった。

(前書き)

前書き

これは魔理沙以外の東方キャラは出てきません。
それだけ承諾してください。
ではどうぞ。

行く当てもなく、どこへなりと筭に乗って自由きままに飛んでいた
魔理沙。時間は昼頃、天気は晴れだ。

魔「それにして・・・暇だぜ・・・どっかに面白そうな事でもない
かなあ・・・」

体を反らし、明らかに不安定な体勢で飛び続けている。

魔「アリスの家か・・・パチュリーの所にも・・・あ。」

前方不注意になっていたので、どこかの山の木々に突っ込んでしま
った。

魔「(・・・やばい・・・出れないぜ・・・)」

予想以上に深く突っ込んだのか、宙吊り状態で身動きが取れそうに
ない。

その時、そんな状態の魔理沙の近くを誰かが通りかかった。

？「・・・あの～・・・大丈夫？」

魔理沙よりやや若い容姿に、長袖半ズボンな子供だ。

魔「大丈夫じゃないぜ・・・」

？「えーっと・・・助けた方がいい？」

魔「そうしてくれると、助かるぜ……」

結局魔理沙はその者の手解きを受けて何とかなった。

魔「いや〜……まいったまいった。前も見ずに飛ぶのはやっぱり駄目だぜ。」

？「え？お姉さんって、空飛べるの？」

魔「そりゃもちろん。だって私は魔法使いだぜ。」

？「へえ〜……そう言われればそんな格好してるね。」

魔「よせやい、照れるぜ。」

？「（褒めた訳じゃないけど……）じゃあ、もちろん魔法も使えるの？」

魔「もちろんだぜ。」

？「じゃあ、どんな魔法？」

魔「一言で言うと……パワーだぜ！」

？「パワー？」

魔「……仕方ない、実際に見せてやるぜ。」

そう言うと、十八番のマスタースパークを構えだした。

魔「はあー・・・いくぜ！マスターアアスパアアク！！！」

そして、文字通りマスタースパークを放った。

魔理沙の目の前にあった木々などはなくなり、文字通り焦土となった。

それを見た子供は、魔理沙に驚嘆の目をして迫った。

？「・・・すごい！！今のどうやったの!？」

魔「どうって・・・言葉で説明するにはちょっと難しいぜ・・・」

？「それって、僕にもできる？」

魔「そりゃ・・・坊主次第だぜ。」

？「じゃあ・・・僕に教えてよ!!！」

魔「ええ？それはえらい急な話だぜ・・・なんで覚えたいんだ？」

？「それは・・・その・・・」

魔「・・・理由が言えないんじゃ、教えられないぜ。」

？「ええ!？そんな・・・じゃあ言うよ・・・僕はこの近くの人里に住んでるんだけど・・・そこでいつもいばってる奴がて・・・みんなそいつに逆らえないんだ・・・」

魔「で、そいつをぎゃふんと言わせたいって訳か？」

？「うん・・・」

魔「・・・じゃあ、まずはそいつがどんな奴か見てやるか。坊主、お前の住んでる人里まで案内してくれ。」

?「わかった。」

魔「おっと、その前に自己紹介がまだだったぜ、あたしの名前は、霧雨 魔理沙だ。よろしくな。」

?「僕の名前は、狼。」

魔「狼か。いい名前だぜ。」

狼「魔理沙さんも、いい名前だよ。」

魔「そうか。ありがとうな。じゃあ道案内頼むぜ。」

狼「うん!!--」

そう言うと、狼は魔理沙がびっくりするほどの速さで走っていった。さすがに早すぎるので、魔理沙が止めにかかった。

魔「ちょ、待て待て!!--早いつてお前!!--」

狼「あ、ごめん。普段は走ってるからつい。」

振り向いて申し訳なさそうな態度を見せる。

魔「・・・今はゆっくり行こうぜ。」

そう言つて、二人は人里までゆつくりと山道を歩いていった。

少女達移動中・・・

しばらくして、二人は人里についた。

魔「ここか・・・これといつて変哲のない所だぜ。で、そのいばつてる奴つてどこだぜ？」

狼「えーつと・・・こっちの方だよ。」

道案内する狼についていく魔理沙。

少し歩くと、子供達があつまっている場所についた。

なぜか二人はそれをこそこそと覗き見ていた。

狼「ここだよ、お姉さん。」

魔「ここつて・・・そいつはどこだ？」

狼「あそこだよ・・・」

狼が指差した先にいたのは、いかにもな体格をした子供だ。その後ろには子分っぽい者もいる

魔「もしかして・・・あいつか？」

狼「うん・・・」

魔「（おいおい・・・こっちはなんて言うか・・・もっと悪い奴を想像してたんだが・・・これってどう見ても子供のリーダー争いかじゃないか・・・）」

呆れるしかない魔理沙。

狼「あいつは他の子よりも力があるから・・・誰も逆らえないんだ・・・だから、僕が何とかしなきゃって思って・・・」

魔「・・・」

狼「ねえ、お願いだよ魔理沙さん！！僕に力を貸してよ！！」

魔「・・・そこまで言うなら仕方ないな。」

狼「じゃあ、僕にさっきの教えてくれるの？」

魔「いや、あれは私の十八番・・・狼には教えてないぜ。」

狼「ええ！？じゃあ・・・」

魔「大丈夫だぜ。ちゃんと坊主にぴったりの奴を教えてやる。」

狼「本当に？」

魔「ああ。とその前に、ジャイア・・・じゃなかった、あいつはどんな風に戦うんだ？」

狼「あいつはただ力に任せて殴ってくるだけだよ・・・それだけでも十分だけど・・・」

魔「よし、だったらお前にこれを教えてやろう。ちょっと耳貸せ。」

狼「うん。」

そう言っつて魔理沙はしばらく狼に耳打ちした。

狼「・・・ええ？それだけ？」

魔「もちろん。きつとあいつもびっくりするぜ。」

狼「でも大丈夫かな・・・そんなんで・・・」

魔「安心しろつて。後は勇気だけだぜ！！」

狼「・・・わかった！！やってみるよ、魔理沙さん！！」

そう言っつて、いかにもな体格をした子供に向かって走っていった。狼が走ってきたので、いかにもな体格をした子供がそれに気づいたようだ。

い「お、狼じゃねえか。臆病者で弱虫なお前が、俺に何の用だ？」

ふんぞり返り、狼を見下す。

狼「僕は・・・お前なんかには負けないぞ！！今から勝負だ！！」

いかにもな子供に指差して言う。

い「はははははは！！お前から俺に挑む気かあ！？おかしい奴だとは思ったが、ここまでとは思わなかった！！お前もそう思うだろ！？」

後ろにいた子分っぽいチビな二人に振り向いて言う。

子1「そうですね！！」

子2「頭がおかしくなったんじゃないでしょうか！！」

いかにもな感じで返事をした。

狼「ふん！！今だけだぞ！！そんな態度でいられるのは！！」

い「そうか！！その台詞はそっくりそのまま返してやる！！さあ！！い！！」

そう言って、いかにもな子供は待ち構える態勢をとった。だが狼は、それとは対照的に逃げるように走っていった。

い「・・・え？」

この行動には、さすがに戸惑うしかなかった。

子1「あいつ、なに考えてるんすかね！！」

子2「あ！！もしかしてここまで来て怖くなったんじゃないすか！！」

い「だとしたら・・・拍子抜けもいいとこだぜ！！はははは！！」
と高笑いをしていると、狼が全速力でこちらに走ってきた。

い「何い！？逃げたんじゃないのか！？」

いかにもな子供の声が響く中、狼はさつき魔理沙に言われた事を思い出していた。

狼、お前は恐らく力じゃあいつに勝てないぜ。だが・・・お前にはその足がある。だからその足を活かす一番の方法を教えてやるぜ。

狼「（僕にはこれしかないなら・・・これで勝つんだ！！）」

さらに速度を上げていく。

い「だがな狼！！所詮お前じゃ俺には勝てないんだよ！！」

さつき見せた態勢で、狼を待ち構えた。

普通喧嘩ってのは真っ向からやるもんだぜ。だから相手もそれを想

定してるはずだぜ。だがそこで違う事をすれば、相手はどうしても戸惑うぜ。だが戸惑わせるだけじゃ駄目だぜ。戸惑っている所に付け込めばお前にだって勝機はあるぜ。

狼「（これが・・・僕の武器だ！！）」

もはやぶつかりそうな距離まで迫った。

い「さあ・・・どう来る！！パンチかキックか！！どれが来ても止めてやる！！そしてほこぼこにしてやる！！」

そう・・・お前が喧嘩で使える一番強力な武器・・・それが、

狼「えいやあ！！」

全速力の頭突きだぜ！

狼の頭突きが、いかにもな子供の顔面に見事当たった。

い「ぐわあ！！」

鼻血を出し、後ろに大きく吹っ飛び、自分も巻き込んで倒れた。

いかにもな子供が起き上がる様子は、なかった。

狼「あれ・・・もしかして僕・・・勝ったの？」

自身でやった事に戸惑った。

子1「そんな・・・あの狼が・・・」

子2「狼め！！次はこうはいかないからな！！」

二人掛かりでいかにもな子供を引っ張って、そこを立ち去っていった。

魔「よくやったな！！狼！！」

遠くから見ていた魔理沙が駆けつけてきた。

狼「魔理沙さん・・・僕・・・勝ったんだ！！これも魔理沙さんのお陰だよ！！ありがとう！！」

魔「何言ってるんだ。勝ったのはお前の実力のお陰だぜ。」

狼「そ、そうかな？」

照れくさそうな様子を見せた。

魔「ああ、だからこれからは胸張ってこう言っんだ。僕がこの町の一番だってな。」

狼「うん！！」

魔「よし、じゃあ私はそろそろ帰るぜ。」

そう言うと、持っている筈にまたがり、そこを飛び去ろうとした。

狼「あ、ちょっと待ってよ、魔理沙さん!!」

魔「なんだ？」

狼「あの・・・魔理沙さんってどこに住んでるの？」

魔「私か？私が住んでるのは、魔法の森の霧雨魔法店って所だ。」

狼「わかった。それじゃ、さようなら。」

魔「ああ、じゃあな。」

軽く手を振った後、魔理沙は颯爽と飛び去っていった。

あれから数日たった。

ある日、魔理沙の所に一通の手紙が届いた。

魔「お？誰からだ・・・ってこれ、狼からのか。あの時何処に住んでるか聞いたのはこの為か。」

封を開け、手紙の内容を読み始める

魔理沙さんへ

お元気にしていますか。僕は今ではすっかり町のリーダーです。

これもみんな、魔理沙さんのお陰です。

お礼などはできませんけど、せめて感謝の気持ちだけは受け取ってください。

狼より

魔「ははは、わざわざ手紙なんかでこんな事伝えなくても・・・まあ、こういうのは悪くないぜ。お？この手紙、P・Sも書いてんな、どれどれ・・・」

P・S

最初会った時、僕の事坊主って言ってたけど、僕は女です。

その最後を読んだ魔理沙は、ただ笑うしかなかった。

(後書き)

後書き

どうでしたか？東方キャラ魔理沙しか出てませんが、まあ一応東方って事で。

最後の女の子発言は、最初から決めていたネタです。

別に男の子でもいいかもしれませんが、わし的には女の子の方がいいかな〜って思っただけです。女は強し！！(>|<)ノ

いかにもな子供のイメージはもちろんジャイン。子分はスオです。ただし主人公はの太ではないので(^|^(

ま、今回は二次創作ってノリより、オリジナルなノリが強いのでそんな感じで読んでくれたらいいと思います。

スペシャルサンクス

霧雨 魔理沙 様

狼 様

いかにもな子供

子分 1

子分 2

では、このような粗末な物を見ていただき、真にありがとうございました。

by 澄田 康美

PS / かつこいい魔理沙は好きですか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0148o/>

魔理沙の青春相談

2010年10月21日00時33分発行